

対人恐怖心性と自己意識についての関連

—質問紙法とロールシャッハ法による比較—

22006FRM 山口 千晴

キーワード：対人恐怖心性，自己意識，ロールシャッハ法

I. 問題と目的

1. 対人恐怖と対人恐怖心性

対人恐怖は一般的に、「他と同席する場面で、強い不安と精神的緊張が生じ、そのために他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係から出来るだけ身を退こうとする神経症の一型（笠原，1993，p.515）。」と定義されている。対人恐怖は青年期に発症しやすく、稲浪・笠原（1968）や木村（1982）によると、一般の学生にも青年期において、対人恐怖的な体験をしていることが多く存在することが報告されている。一般の青年にもみられる対人恐怖では、人見知りや過度の気遣い、対人緊張が認められ、一般の青年にみられる心理傾向は、対人恐怖心性と呼ばれる（永井，1994）。対人恐怖心性は、抑うつ（金子他，2003）、不安感（堀井，2006）、過敏型自己愛（上地・宮下，2009）との関連がみられ、臨床的問題との関連が分かっている。

2. 対人恐怖心性と自己意識

対人恐怖心性は、自己意識との関連も認められている（Buss，1980）。自分の内面に注意を向ける自己を私的自意識、外面的な自己に注意を向ける自己を公的自意識と呼ぶ（Fenigstein et al，1975）。対人恐怖および対人恐怖心性においては、特に公的自意識との関連があることが分かっている（菅原，1984）。しかし、自己意識を私的自意識と公的自意識の組み合わせによって検討した研究はあまり行われていない。

3. 対人恐怖心性とロールシャッハ法

対人恐怖においては、参加者の無意識的な部分を測定できる投映法による研究もいくつか行われている。投映法の1つであるロールシャッハ法では、対人恐怖症者はM%、FK%、pureH%の

出現が低いこと（村澤，2003）、対人恐怖心性の高いものは特殊な人間反応が多く出現したこと（野崎，2007）が分かっている。人間反応に関連する研究が多く、無意識的な対人意識が対人場面における振る舞いに影響を与えられられる。

4. 目的と意義

対人恐怖心性において、公的自意識と私的自意識の組み合わせから検討し、私的自意識の及ぼす影響について検討を行う。

また、質問紙とロールシャッハ法を行うことで、意識下と無意識下の関係を明らかにする。対人恐怖心性の高低と、公的自意識の高低により群分けをすることで、意識的な公的自意識が対人関係において及ぼす影響について検討する。対人恐怖心性を抱える人たちの無意識的な問題を把握することができ、支援のあり方を考える一助になるのではないかと考える。それにより、臨床群への理解にもつながると考える。

II. 研究1

1. 方法

1) 調査協力者および分析対象者

A 大学に通う心理学部の学生に調査を行い、男性 56 名、女性 218 名、答えたくない 6 名の計 270 名のデータを分析の対象とすることとした。

2) 質問紙の構成

(1)自己意識尺度を測定する尺度（21 項目）、(2)対人恐怖心性を測定する尺度（30 項目）、(3)フェイスシート（学年、年齢、性別）、(4)ロールシャッハ法に関する依頼書、の 4 つから質問紙を構成した。

2. 結果

私的自意識と「自分や他人が気になる」の間には弱い正の相関 ($r = .215$, $p < .01$) がみられたが、対人恐怖心性、その他の対人恐怖心性の下位

尺度との間には有意な相関がみられなかった。公的自意識は、対人恐怖心性、「自分や他人が気になる」、「社会的場面で当惑する」、「生きることに疲れる」、「目が気になる」、「自分を統制できない」との間には正の相関 ($r = .456, p < .01; r = .718, p < .01; r = .490, p < .01; r = .359, p < .01; r = .243, p < .01; r = .227, p < .01$) がみられた。「集団に溶け込めない」との間にはほとんど相関 ($r = .169, p < .01$) がみられなかった。

対人恐怖心性、「社会的場面で当惑する」「生きることに疲れる」「目が気になる」「自分や他人が気になる」「自分を統制できない」では、公的自意識の主効果が認められた ($F(3, 266) = 33.5, p < .001, F(3, 266) = 28.31, p < .001, F(3, 266) = 18.67, p < .001, F(3, 266) = 4.91, p = .028, F(3, 266) = 126.11, p < .001, F(3, 266) = 11.67, p < .001$)。「集団溶け込めない」では、交互作用が認められた ($F(3, 266) = 4.19, p = .042$)。

Table 1 自己意識における「集団に溶け込めない」の二要因分散分析結果

		公的自意識 ($M \pm SD$)		F		
		高	低	私的自意識	公的自意識	相互作用
私的自意識	高	4.15 ± 1.50	4.23 ± 1.72	0.16	2.6	4.19*
	低	4.63 ± 1.43	3.91 ± 1.49			

N=270

* $p < .05$

III. 研究2

1. 方法

1) 群分け

検査対象者を選別するために、各尺度の平均値を基準に群分けを行った。その結果、公的自意識高群・対人恐怖心性高群を1群、公的自意識高群・対人恐怖心性低群を2群、公的自意識低群・対人恐怖心性低群を3群、公的自意識低群・対人恐怖心性高群を4群とした。

2) 検査対象者

ロールシャッハ法は、質問紙に付属した依頼書に必要事項を記入した93名から各群4名、計16名を検査対象として実施をした。

3. 結果と考察

1群は、人間反応においてネガティブなイメージが含まれているものが多く、不安を抱いていた。2群は、Mask反応が全員にみられ、対人場面で不安を感じながら不安や恐怖を避けていることが分かった。3群と4群では、1, 2群に多くみら

れたH/のスコアが少なく、不安感情も少なかった。対人場面において感情に左右されずに振る舞えることが考えられた。1, 2群はどちらも公的自意識が高い群であるため、公的自意識の高さは対人恐怖心性に影響を与えることが示唆された。

1群(事例A)と3群(事例J)の個別事例を比較すると、CF+CとSICにおける自己像の違いが顕著であり、1群は情緒表出の過剰な統制と、否定的な自己像による自己不全感から不安や緊張が高まっていることが考えられた。

Table 2 各事例のスコア

	FC:CF+C	Anxiety%	Positive Feeling%
事例A	6:0	41.7%	16.7%
事例J	6:2	8.7%	43.5%

Table 3 各事例のセルフイメージカード (SIC)

事例	カード	選択理由
事例A	VII	ふちがはっきりしていない感じが、優柔不断なところ、はっきりしていない感じと似てるから。
事例J	IIとXの間	肺で内向きかな？ってところもあるけど、傷つきやすい。その反面、のんびりでマイペースで、適度に色がある感じが自分ばい。

IV. 総合考察

研究1, 2を通じ、公的自意識が対人恐怖心性に大きく関連していることが分かった。1, 2群はH/・Hd反応、不安感情の多さが共通していた。一方で、1群は人に対する不安を、直接的な不安や脅威として感じていた。2群は、1群に比べポジティブ感情がみられたが、その中にも不安を抱えており、その不安を避けるようにして対処していることが考えられた。

私的自意識については、公的自意識が高い場合、私的自意識の高さが「集団に溶け込めない」を抑制し、公的自意識が低い場合は私的自意識の低さが「集団に溶け込めない」抑制をしていた。私的自意識は自己内省の側面があり、内省の結果自己をどう捉えるかという視点が対人恐怖心性の違いを及ぼしたことが考えられる。私的自意識が高くても、自己受容または、自己批判的に自己を捉えるかによって対人恐怖心性に対する影響は大きく異なることが推察された。研究2の個別事例におけるセルフイメージカードにおいても1群は自己批判的に、3群は自己受容的に自己を捉えていた。そのため、対人恐怖心性において私的自意識も一部関連があることが分かった。